

西光

第 14 号

百橋山 西光寺
高岡市京町一〇―二五
電話(〇七六六)二二―二九七
FAX(〇七六六)二二―三三七〇
平成十二年十一月二十八日

西光寺御堂建立 ―平成十四年完成を目指して―

数百年の歴史を経た西光寺御堂は、その歴史の中に多くの先人達の人生を見守ってきた。この世のご縁に恵まれ長寿を全うした人、また幼くして娑婆のご縁の薄かった子供達、また災害や事故に遭って非業の最期を遂げた人、そして生老病死の道をたどりながら本願念仏の志に篤く来るべき旅立ちに不動の信心をもって往生した人、など。また良縁に出会い、ご先祖に感謝の報告をしたのも家々の仏壇であり、大きな祝福を頂いたのも御堂にまします仏様であった。御遠忌や大法要などにはたくさんの稚児行列が繰り出され、子供の健やかな成長をお願いしては仏様の周りをぐるぐる回ったのである。また報恩講をはじめ、御正忌、祠堂経、尼講など御堂には事あるたびに門徒衆が集い、共に論議し、共に語らい、共に念仏三昧の時間を過ごしたのもこの御堂であった。人生の様々な節目節目に仏縁を頂いてこられた多くの門徒衆の心の拠り所であったといつてよい。

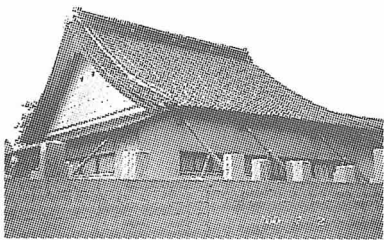
さて、しかしこの由緒ある御堂も長年の風雪に耐えきれず、後に傾斜しては支柱で支える有様で、屋根瓦は波打って雨漏りの危険甚だしく、専門家の診断では、もはや修理の見込みはなく、再建あるのみとされた。原因としては、御堂の正面の前部分と後部分とは材木に相当の新旧材としての強度に差があり、また柱も細く、屋根加重を支えるには不十分と考えられる。当初の御堂はおそらく江戸時代では瓦葺きではなく、軽量の板葺き茅葺きであったのを、江戸時代末期明治初期に重量の重い瓦葺きにしたので重量に耐えきれないのではないかとされ、またもともと土台基礎や地盤の軟弱も影響しているものと思われる。よって構造的に弱い要素をもっていたものらしい。そこで、欄間や樺材などの再使用可能な材は極力利用して節約するとしても、基本的には材を統一して、強度的なバランスを保ち、基礎も杭打ちを含め、根本から再建する事となった。殊に大規模木造建造物の生命は一つに宮大工の技量、そして二つにはその木材の善し悪しに尽きるのである。今日天然の、しかも巨木はなかなか入手が困難である。できれば檜や樺などの耐久性に優れた材がほしい。また北陸の気候風土に鑑みては、風雨、風雪の湿気や重量に耐える材でなければならぬ。クサマキなどの水に強い材がいい。しかし当然予算にも限りがある。一方で今数百年ぶりの御堂再建にあたっては後世に恥じないものにしなければならない。

平成十二年十一月三日、西光寺建設委員会

委員長向井英二氏をはじめ、総代各氏、また専門委員の諸氏の立ち会いのもと、富山県婦中町長沢の宮大工酒井匠、棟梁酒井仁義氏との間に建築施工の契約を交わした。この再建基本計画が建設委員会において審議承認さ



現本堂 正側面

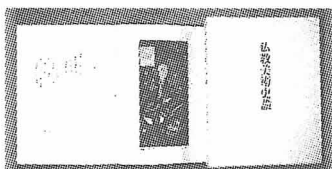


現本堂 背面

れ、趣意書や説明書が配布され、壮大なる御堂建立の意義が知れ渡ると共に、以来既に多くの門徒衆から貴重な浄財・懇志が続々と寄せられ、おかげさまで最初の契約金をお届けすることができた。まったく頭の下がることである。誠に以て仏法の偉大なるご加護といよいよ頼もしく思われる。今後なお完成時まで、昨今の厳しい状況の中、一層の御心をお寄せ頂きたく次第である。これで、いよいよ本格的な建設工事に入ることとなった。現本堂庫裏などの解体撤去などの野外工事は雪の明けた来春三月からとし、来夏には上棟を、さらに平成十四年夏を完成のめどとしている。内装その他もあつて、おそらく完成は平成十四年いっぱいになるものと思われる。工期は足かけ三年、丸二年となろう。工事の途中、折りをみてはその都度、現地見学会を開催して、門徒衆には進捗状況を見ていただくことにしたい。まずは来三月には解体に伴う現本堂の現状を確認していただきたい。棟上げにはできるだけ多くの門徒衆が結集して立ち会っていただきたい。来春から約二年間は寺族は近くの借家にも引っ越ししておりますので、不便をおかけいたしますが、また連絡先をお知らせします。そしてこの間報恩講や祠堂経などの行事は休止する他はありません。しばらく皆様の顔が見られないのも気がかりです。一方お盆の墓参りなどは不便かもしれませんが、危険のないように注意して執り行いたく存じます。

《住職、文学博士となる》

この度、長年の研究成果をまとめた著書『仏教美術史論』（平成十二年二月、中央公論美術出版社、定価二万四千元）を出版した。その成果が高く評価され、平成十二年十月、母校である東京大学から「文学博士」の学位を授与された。



出版された『仏教美術史論』

《仏教豆知識》

「御堂・本堂・金堂」

御堂（みどう）とは寺院にて尊像を安置する堂。本堂（ほんどう）とは一寺の本尊を安置する堂。古くは金堂と称せり。金堂（こんどう）とは伽藍の中心にして本尊を安置する佛殿をいう。堂内を金色になすより此の名ありという。阿弥陀堂とは阿弥陀仏を安置する堂。御影堂（ごえいどう）とは、各宗派の開祖、開基の像を奉る堂。講堂（講堂）とは法を説き経を講ずる堂舎。

《和讃》

七寶講堂道場樹

方便化身の浄土なり

十方來生きはもなし
講堂道場禮すべし

また講堂に法を聞き

あるいは樹蔭に道を思ふ

方便となる浄土へと
生るる人はきわもなし

（金子大栄訳）

百橋山西光寺御堂・庫裡完成予想模型写真

